

慈円撰述「本尊釈問答」

阿部 美香

【解題】

はじめに

青蓮院門跡吉水藏聖教に収められた「本尊釈問答」は、これまで未紹介の慈円著作聖教である。表紙中央に「一曼荼羅¹⁾」と記されるように、一曼荼羅（仏眼曼荼羅）及び十一尊の本尊と行法に対する釈を問答により記している。但し、問答が置かれるのは後半部で、前半部には慈円が「真俗二道」を覚知して作った「二巻」、すなわち「道理」一巻と「本尊釈」一巻の成立をめぐる経緯や要旨が記されている。

「道理」一巻及び「本尊釈」一巻の写本は未だ見いだされていないが、「道理」一巻の語は「門葉記」所収「横河楞嚴三昧院慈鎮和尚被_レ遣_二西園寺大相国_一状」（以下に公経宛書状と称する）に見え、従来は『愚管抄』（具体的には巻七）をさすと考えられてきた書名である。一方、「本尊釈」及び本書と結びつのが、多賀宗準により紹介された「本尊縁起」一巻である。⁴⁾多賀はこれを慈円自草、承久元年の成立と認め、慈円の「思想的遍歴と思索的錬磨の終着駅たるの地位を占め」、「道理」の思想、乃至はその確信の到達の頂点を示す³⁾「聖教として、慈円の教学と『愚管抄』との関連から注目した。本書はこれと密接な関係にあり、「道理」一巻ひいては『愚管抄』の成立過程を照らし出す重要な手掛かりとなろう。以

下にその概要と特色を紹介し、翻刻を掲載する。

一 書誌及び成立と伝来

まず書誌を記す。原本は未見のため、『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』⁵⁾を参照し、確認し得た情報を加えて示しておく。

〔本尊釈問答〕一冊、吉水藏第六〇箱十二。

鎌倉時代元亨二年（一一三二）慈嚴写。

外題「本尊釈問答」、表紙中央「一曼荼羅¹⁾」、内題・尾題なし。

袋綴装。斐紙。法量縦一五・三種、横二六・二種。表紙は本紙共紙。

墨付四十丁、遊紙あり（前一丁、後四丁）。無界。本文に片仮名訓・

返点・送仮名・連読符、区切点等あり。合点、首点は朱筆か。

識語（32丁ウ）「件道理本尊釈等二巻、書写一帖加置之、可宜歟、承久

二年正月六日、於無動寺大乘院書之了、金剛仏子慈₁₎」。

奥書（40丁オ）「元亨二年七月廿日、以和尚御自筆本跪書寫之訖、清

浄金剛慈嚴記之」。

伝領識語（表紙右下）「求法沙門尊純」（後筆）。

本書は、承久二年（一一三〇）に慈円が著し、元亨二年（一一三二）

に慈嚴により「和尚（慈円）御自筆本」をもって写された転写本である。

表紙識語から、江戸時代初期には第四十八世青蓮院門跡尊純法親王（一

五九一—一六五三)の伝領本となっていたことが知られる。慈嚴(一一九八—一三五九)は曼殊院門跡を継ぎ天台座主を務めた天台僧で、「慈鎮和尚夢想記」を書写し、花園院の護持僧として即位灌頂の秘事を伝授した人物である。本書が「毘婆沙」など慈圓に関わる事相書や口伝書を書写し禁中の御修法に勤仕した慈嚴によって書写され、尊純伝領本として青蓮院に伝来した意義は大きい。

書写の形態は横長の袋綴本であるが、本文中に本書を「双紙」と記すことから、原本も袋綴かそれに類する装訂であったと覚しい。

十四丁目から始まる問答は、識語を挿み合計三二を数える。識語の後の問答は本来は五つめの問答に続くものであつたらしく、問答の「問」の字に補入対象であることを示す印が付き、補入先である五つめの問答の上部(17丁ウ左上)には補入場所を指示する「○」印が付される。両者の本文は直接に繋がらないものの、内容は連続している。慈嚴の書写した段階で、原本に錯簡が生じていたか、あるいは慈圓自身の思惟の進展を示すものであろうか。

二 「本尊釈問答」の成立

「本尊釈問答」は、冒頭の前書及び慈圓識語によって、「道理」一卷と「本尊釈」一卷に附属する一帖として記されたことが明らかになる。「道理」の書と「本尊釈」が真俗二諦を分かちあうように作られ、その「心」をあらわすべく「本尊釈問答」を伴い二巻一帖を成していたことは、初めて知られる事実である。しかも、本書には「去年孟夏下旬、書二件道理、于今無相違、其後仲秋之比、深加案之間、先立書三本尊釈了、若遂其願者、欲備縁起文也」(10丁オ・ウ)とあつて、承久元年(一一一九)四月下旬にまず「道理」一卷が書され、続いて八月頃に「本尊釈」一卷が「本尊縁起」を書くために撰述された経緯も知られる。翌承

久二年正月六日に本書が成り、それほど時を隔てぬうちに「本尊縁起」も著されたことだろう。

加えて注目されるのは、「道理」一卷が、慈圓の発願をもって諸社に啓白されていたことである。慈圓は、將軍実朝の横死という前代未聞の事態に伴って二歳の三寅御前が関東に下向した出来事こそ、「撰録臣」と「武將家」という「文武の両家」となった九条家がともに「王家之忠臣」として政治を中興する予兆ととらえ、自らの覚知した道理を一卷にあらわして、北野天神、八幡大菩薩、伊勢大神宮などの諸社に啓白し(9丁オ・ウ)、神々の照覧に入れた。

その成就のため重ねて発願されたのが、仏眼曼荼羅及び十一尊の行法である。そこには多賀の指摘するように、慈圓の生涯にわたる行法と教学の成果が注ぎ込まれている。本尊奉安の場は記されていないが、多賀は『門葉記』所載「大懺法院条々起請事」の掲げる本尊と対比して、構成の相違に疑問を残すものの、大懺法院と推測する。仮にそうであれば、承久元年から二年にかけて、慈圓が後鳥羽院の祈願所であつた大懺法院の儀礼空間を、あらたな中興の発願に不可欠な儀礼空間として構想した営みの一端が浮かび上がってくる。

三 啓白された「道理」一卷の書

「本尊釈問答」の内容構成を見てみよう。本書は、冒頭に前書に当たる一段を掲げ、そのもとに①「道理」一卷と「本尊釈」の由来を述べた上で、②「道理」一卷の発願と旨趣を明らかにし、③「本尊釈」の発願と旨趣及び問答をあらわすという具合に、およそ三段階をもって「道理」一卷及び「本尊釈」一卷に対する門徒の不審に答えるべき書として構成されている。

まず最初に記されるのが、①「道理」一卷と「本尊釈」を記すに至っ

た由来である。その本文は、「建保七年己正月廿七日、彼右大臣源実朝
零命了」という衝撃的な一文から始まる。慈円は將軍実朝の横死と三寅
の関東下向という事態を、「真俗事」について祈った正月の天王寺にお
ける祈請と夢想を踏まえ、八幡大菩薩の「御方便」に他ならないと確信し、
その由縁を示した。

建保六年（一一一八）正月に中宮懷妊の報があり、二月朔日に八幡へ
参籠、手替りに祈念する。三月五日も通夜し、法華經一部と神呪一万遍
を法樂したところ、その夜、石清水八幡檢校祐清に法施納受の夢告があつ
た。十月、果たして王子が誕生し、十一月に立太子する。翌年、八幡の
宝前で実朝が暗殺され、二三月月の間に左大臣若公が將軍家の後継者と
して所望され跡を継ぐことになった。三寅の父九条道家をはじめ人々が
疑問を抱くなかで、慈円は「予悟此由来」、書「一卷道理」、作「本尊尺
等」了、令「為後見粗記之」として、「道理」一卷と「本尊尺」をあら
わしたという。

慈円が実朝の滅亡を八幡の方便であると覚知する過程において、石清
水八幡への参詣とそれに伴う檢校祐清の夢告感得が関わっていたことか
らは、八幡の重要性があらためて浮かびあがる。加えて「似符合」とし
て、同建保七年二月廿四日に夢告があり、閏二月三日に三寅所望の報せ
を伝え聞いて、「自尔以来、覚知万事」、如「予存無覚悟人歟、仍書
「道理」一卷」と記す。「道理」一卷は、將軍下向の知らせを受けて、
六月の下向に先立って記されていたのであり、將軍下向を確実なものと
すべく発願の成就を願う慈円の強い願意が見て取れる。

その上で仮名書で書きあらわさなければ「愚意之詮」、つまり自らの
本意は覚知されないであろうとの配慮とともに記される②「道理」一卷
の内容は、その要点を汲み取って叙述される点、いわばそのダイジェス

トとして注目される。そこに慈円は、二神約諾に始まる歴史の推移を示
しつつ、末代に道理が失われることになった原因が君臣の嫉妬驕慢にあ
ることを聖徳太子十七条憲法を本文として示した。その上で再び乱世の
推移を説いて、八幡と吾神（春日）の守護のもとで文武兼行となった九
条家により政治が中興するであろう道理を書きあらわした。それは、自
らの覚知を神々の照覧に入れその守護を願うためであり、北野社では、
道真が時平の讒言により左遷された「大事」を「北野大権御方便」であ
るとの「覚知」について啓白したという。慈円の発願は、八幡大菩薩、
伊勢大神宮において納受され、その「道理」にあやまちないことを伊
勢の神が証明するように、内宮一祢宜氏能（氏良）の返報として「至極
道理」、一定道理の詞も記録されている。

本書の記す「道理」一卷の旨趣や本文には、やがて『愚管抄』に書か
れる内容が先取りされ、両者の関係性を考える手がかりとなる。主な例
を示せば次のようである。

◇將軍三寅の関東下向

「本尊尺問答」

件少人^ハ二歳、称^三寅御前^{云々}、寅歳寅月寅時令^三誕生^二了、仍有^三
此名^{云々}、六月廿五日、下向ノ日^{ヨリ}一切無^三泣音^{云々}、其進退似^三成
人心^{云々}、上下即從^三歸之^一、

『愚管抄』卷六

二歳ナル若公、祖父公経ノ大納言ガモトニヤシナヒケルハ、正月寅
月ノ寅ノ歳寅時ムマレテ、誠ニモツネノヲサナキ人ニモ似ヌ子ノ、
占ニモ宿曜ニモメデタク叶ヒタリトテ、ソレヲ、終ニ六月廿五日ニ、
武士ドモムカヘニノボリテ、クダシツカハサレニケリ。京ヲ出ル時
ヨリクダリツクマデ、イササカモクナクコエナクテヤマレニケリ
トテ、不可思議ノコトカナト云ケリ。

◇安徳天皇の誕生

「本尊釈問答」

清盛平太相国入道カ娘入内立后、高倉院在位為「中宮」、令祈「男子誕生」、先母「二品祈」山王、「不_レ得_二其驗_一」、入道云、「我祈_二嚴嶋神_一」百日内可_レ有_二其驗_一」云々、嚴嶋者安芸国ノ一宮、龍女云々年来帰也、以_二御子女篋_一称_二内侍_一、仍造_二早船_一頻參詣、六十日之後、中宮懷妊、奉_レ生_二安徳天皇_一、清盛、帝ノ外祖ト成_二一向独歩_一、仍打_二籠法皇_一、取_二国政_一之間、及遷都之大事也、依_レ之、滅亡之今、主上_{安徳}遂以浮_二海上之沈_一海底_一給了、是則、龍神之一旦_一構也、

「愚管抄」卷五

承安元年十二月十四日、コノ平太相国入道ガムスメヲ入内セサセテ、ヤガテ同二年二月十日立后、中宮トテアルニ、皇子ヲ生セマイラセテ、イヨ／＼帝ノ外祖ニテ世ヲ皆思フサマニトリテント思ヒケルニヤ、様々ノ祈ドモシテアリケルニ、先ハ母ノ二位日吉ニ百日祈ケレドシルシモナカリケレバ、入道云ヤウ、「ワレガ祈ルシルシナシ。今見給へ祈出デン」ト云テ、安芸国嚴島ヲコトニ信仰シタリケルへ、ハヤ船ツクリテ月マウデヲ福原ヨリハジメテ祈リケル。六十日バカリノ後御懷妊トキコエテ、治承二年十一月十一日六波羅ニテ皇子誕生思ヒノ如クアリテ、思フサマニ入道、帝ノ外祖ニナリニケリ。(中略)其後コノ主上ヲバ安徳天皇トツケ申タリ。海ニシツマセ給ヒヌルコトハ、コノ王ヲ平相国イノリ出シマイラスル事ハ、安芸ノイツクシマノ明神ノ利生ナリ。コノイツクシマト云フハ龍王ノムスメナリト申ツタヘタリ、コノ御神ノ、心ザシフカキニコタヘテ、我身ノコノ王ト成テムマレタリケルナリ、サテハテニハ海ヘカヘリヌル也トゾ、コノ子細シリタル人ハ申ケル。コノ事ハ誠ナラントヲボユ。

◇聖徳太子十七条憲法

「本尊釈問答」

聖徳太子_{子歟}十七ヶ条憲法在_レ眼、第十云、(中略)賢_ク愚_{コト}如_二環無_レ端_一、是_レ以、我独_{トリ}雖_レ得、從_レ衆同_{マツク}拳_{トス}、第十四云、群臣百寮_ハ無_レ有_二嫉妬_一、我既_レ嫉_レ人、々亦_レ嫉_レ我、嫉妬之患不_レ知_二其極_一、

「愚管抄」卷七

聖徳太子ノ十七条ノ中ニ、嫉妬ヲヤメヨ、嫉妬ノ思ヒハソノキハナシ。カシコクヲロカナル事ハ、又タマキノハシナキガトシ。我一人エタリトナ思ヒソトイマシメテ、

その本文は、本書が漢文体の要素を色濃く有するのに対し、『愚管抄』は漢字片仮名交じり文で記され、対照的である。しかし、慈円にとり、どちらとも仮名書であったことは注意しておきたい。たとえば、慈円が承元四年(一一二二)に記した『蘇悉地経問答』も、奥書の末に「如_レ此口訣、皆一向_二仮名書_一如_レ常_二仮言書_一之、若見_レ之人勿_レ令_二嘲哂_一、是一向_二為_レ心得_一也」と記し、漢文体に近い本文を仮名書と称している。本書が「道理」一卷について、「件旨趣、在_二彼卷_一而分明也、但取_レ心仮名書_二不_レ書_一頭_一之者、猶_レ愚意之詮、難_レ覚_二知其本意_一歟」と記して書き出す本文は、よく見れば和文化的された漢文体であり、訓み下せば自ずと仮名書となる。本意をあらわすという趣旨のもとに、慈円にとつて本書は問答を含め全体が仮名書なのであり、『愚管抄』において慈円が「愚痴無智ノ人ニモ物ノ道理ヲ心ノソコニシラセントテ、仮名ニカキツクルオ、法ノコトニハタゞ心ヲエンカタノ真実ノ要一トルバカリナリ」(巻七)として漢字片仮名交じりで記す表記方法は、それをさらに和らげたものとして捉え直すことが出来るだろう。

四 「本尊釈問答」の特色

本書後半③「本尊釈」についての問答に至ると、慈円はまず天台座主

を四度務め、七十歳に至ってもなお行法の研鑽を積む自らの経歴を振り返り、仏眼曼荼羅の行法を十一尊について「真金像」として造立し行う旨趣を明らかにして、行法を体系付けた上で問答を重ねる。その内容を「本尊縁起」と比較すれば、直ちにその土台をなすものであることが明らかであり、そこに集約された慈円の教学や思想を捉え直す点でも重要な意味を持つ。本書の重要性は、これら本尊と行法をめぐる積が「道理」一卷と一具をなして『愚管抄』にあらわされた歴史観、すなわち道理を説く思想の根拠を示すところにある。

つとに多賀が「本尊縁起」を通して明快に論じた通り、本書に体系化された仏眼曼荼羅の行法は、安然の『教時問答』や『瑜祇經修行法』を拠としつつ、観性に学んだ仏眼法の上に創出されている¹³。ここでは、そのもとに一仏一切仏を具現する本尊として選り出され鑄造された十一尊をめぐる積に注目したい。慈円識語の前に位置付けられた「領解之上、問」では、最後に薬師と観音が焦点化され、「於薬師観音、伝教弘法之本尊、渡唐求法之本意、真俗四聖之变化、現当一途之利生、於証拠一者非可成不空、於道理今少可被加述、已上領解之上、問也」と記す。その答えとして掲げられた薬師と観音の積のうち、観音積には「観音、急難之無畏、只可在濁世、其上、此観音、弥陀之同身、法花之同体、ヒシト説教、決定、其弥陀之教、其妙法之文、以此二教、今世衆生一向帰之、行之、而聖德太子、慈恵大師、大織冠、菅丞相、一定観音化身也」と記され、観音が阿弥陀と同身であり法花と一体であるとした上で、観音が人界においては聖德太子、慈恵大師、大織冠、菅丞相と現れて利生を垂れる道理が示されていた。「本尊縁起」にも説かれるその所説は、大懺法院における法華法の次第作法の口訣をあらわした『法華別私』（承元三年〔一一〇九〕）において、観音の積として弥陀、法華との同体を説き、「依之、先日本国聖德太子救世観音也^{如意輪}、我山^{二六}又慈

恵大師^{観音也}、六十余国一切靈所以¹⁴観音^一為^二本尊^一」と論じた延長上に位置付けられよう。

重要なのは、この積が『愚管抄』卷三に「コノ日本国観音ノ利生方便ハ、聖德太子ヨリハジメテ、大織冠、管丞相、慈恵大僧正カクノミ侍ルコトヲフカク思シル人ナシ」と記され、二神約諾のもとに王法と仏法が支え合う『愚管抄』の歴史観と響き合うことにある。更にその積は、承久の乱を経て慈円が著した大懺法院再興の願文にも「薬師本願、観音利生、情思^レ之、伝教弘法之両大師、以^二薬師如来^一為^二本尊^一、護^レ持平安大城、時運依^二未^一尽、仏子起^二此願^一、聖德太子、大織冠、北野天神、慈恵和尚、皆是観世音化現、施無畏方便也、此観世音即法華也、此法華即観音也¹⁵」とあつて共通する。願文には大懺法院の本尊として阿弥陀三尊とともに祖師大和上本尊（薬師）と不動・毘沙門の奉安を記し、また別に、絵像の十五尊を本尊とする長日の勤行のための「十五尊積」も整えられた¹⁶。これと一曼荼羅十一尊の行法は区別されるべきものであるが、慈円の発願のもとに包摂されるものであったと考えれば、それは慈円の本尊をめぐる認識の通時的展開を問う上であらためて重要な意義を持つ。

その一連の営みが、一方で楞嚴三昧院再興とも軌を一にしていたことも、注目しておきたい。公経宛書状（承久元・二年頃）¹⁷において慈円は、三寅の後見人である公経に対し、楞嚴三昧院が、（観音の化身である）慈恵大師と九条師輔の約諾によつて建立され、師輔の誓願とともに撰録の家としての繁栄を願う象徴である由緒を語り、「大將軍三寅御前」の御料による楞嚴三昧院の再興を強く勧めた。このとき、慈円は公経に対し、「大神宮鹿島御約諾ハ道理一卷二書」きまいらせた通りであり、東宮と將軍の御事は九条殿の誓願力が未だ尽きていない証であるとして、楞嚴三昧院の再興及び真言堂での九条殿の御遠忌を勧めるとともに、「八講曼荼羅供被^二興隆^一者、今度ハ武家加^二撰録家^一天下を令^二改理^一給へき、

仏法之加護玄道ハ、必然ニ本末相叶」と説いた。その発願の旨趣は、「道理」一卷のもとに「本尊釈」をあらわし「本尊縁起」を作る旨趣とも呼応する。また、同じ公経宛書状のなかで、慈円は、八幡の意向を理解せず、將軍下向を快しとしない後鳥羽院に対しては、君の聖運が尽きようと警告した。その危機感は、より緊張感をもって『愚管抄』巻七に表明される。⁽¹⁹⁾

『愚管抄』巻七は、「道理」一卷と「本尊釈」並びに「本尊釈問答」、そしてそれらの頂点に位置する「本尊縁起」とともに、公経宛書状を『愚管抄』成立の前に位置付けて読むことで、より一層理解が深まる。巻七のみならず、「道理」一卷及び「本尊釈」から「本尊縁起」に至る過程の中で慈円が覚知した道理や歴史認識は、『愚管抄』全体に流れ込み、その撰述を支える骨格をかたち作っていたと考えられるだろう。

おわりに

「本尊釈問答」が無動寺大乘院において記されたのは、承久二年正月六日のことであった。『愚管抄』の皇年代記(巻一・二)には同年十月にこれを記し終わった旨の識語がある。そこから推測すると、『愚管抄』の執筆は、それまでの蓄積を経て想像以上に短期間のうちになされた可能性がある。折しも、同年四月に吉水坊が炎上する。⁽²⁰⁾大穢法院の本尊は悉く救出されたが、その不測の事態は、後鳥羽上皇の動向に対する危機感を募らせると同時に中興の実現をより切実に欲し、『愚管抄』執筆を促したのではないか。かつて赤松俊秀は、慈円自筆願文(曼殊院旧蔵、貞応元年)により、建保四年(一二二六)に聖徳太子から受けた夢告が慈円にとり重要な意味を持っていたことを明らかにして、承久二年の再度の霊告に刺激をうけて『愚管抄』が執筆された可能性を指摘した。⁽²¹⁾夢告は、それを促すものだったかもしれない。

「本尊釈問答」の出現によってこれらの成立に関する相互の関係が明らかになったことから、『愚管抄』の成立を照らし出すあらたな座標が獲得されたといえよう。「道理」一卷とは、『愚管抄』のいわばブレ・テクトとして、八幡の方便を覚知し真俗二諦を観じて中興を発願する慈円の活動の焦点にあつて、「本尊釈」「本尊釈問答」を併い、「本尊縁起」の制作や楞嚴三昧院の再興をも支えた理論書であつたと推測される。真俗二諦の覚知のもとに編まれた「道理」一卷と「本尊釈」一卷の要諦を、仮名書の問答という手法をもって書きあらわした本書は、慈円の世界観を照らし出し『愚管抄』を読み解く手がかりとして不可欠な宗教テクストであつた。⁽²²⁾

〔註〕

- (1) 本文は、史料編纂所閲覧室の情報端末Hi-CAT Plus (史料画像閲覧システム) により閲覧し翻刻を行った。
- (2) 多賀宗集編『慈圓全集』(七文書院、一九四五年)所収。『鎌倉遺文』二六九八号。
- (3) 三浦周行は本史料を見だし、『愚管抄』が慈円著述であることを裏付けた。三浦『愚管抄』(『日本史の研究』第一輯下、岩波書店、一九二二年。初出一九二〇年)。「愚管抄」をめぐる研究書は数多く、赤松俊秀『鎌倉仏教の研究』(平楽寺書店、一九五七年)、筑土鈴寛『慈圓―国家と歴史及び文學』(三省堂、一九四二年)、多賀宗集『慈圓の研究』(吉川弘文館、一九八〇年)、大隅和雄『愚管抄』を読む―中世日本の歴史観』(平凡社、一九八六年)、石田一良『愚管抄の研究―その成立と思想』(べりかん社、二〇〇〇年)、尾崎勇『愚管抄の創成と方法』(汲古書院、二〇〇四年)、深沢徹『愚管抄』の(ウソ)と(マコト)―歴史語りの自己言及性を越えて(『森話社、二〇〇六年)などがある。
- (4) 註(3)前掲『慈圓の研究』第二部第四章、「論集 中世文化史下 僧侶篇」(法藏館、一九八五年)所収。吉水蔵七五箱七。鎌倉時代後期写本、

粘葉裝。表紙右上に「重本巻本有之」とあり、巻子本も存していたとわかる。

- (5) 吉水藏聖教調査團編『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』(汲古書院、一九九九年)。

- (6) 松本郁代『天皇の即位儀礼と神仏』(吉川弘文館、二〇一七年)。

- (7) 「本尊縁起」の成立年は承久元年ではなく二年に修正される。

- (8) 註(3)前掲『慈圓の研究』第二章第四章。大儀法院の十五尊は金輪、仏眼、尊勝、不動(密教の本尊としての四尊)と、釈迦、弥陀、弥勒、普賢、文殊、薬師、千手、十一面、地藏、虚空蔵、毘沙門の十一尊(顕教の本尊)から構成された絵像の本尊である。対して、本書及び「本尊縁起」の説く十一尊は、大日、釈迦、阿弥陀、弥勒、普賢、文殊、薬師、観音、地藏、不動、毘沙門から構成される鑄造仏である。

- (9) このとき慈円が法楽した真諦五十首俗諦五十首には、聖徳太子の本地である観音の誓願と憲法十七条が、真俗二諦を分かち詠われている。

頼むぞよ施無畏の誓ひあらたなれ晴るれば曇る星を見るにも

十あまり七つの誓ひせし人の跡踏む御代を見るよしもかな

慈円はこの百首和歌の法楽を正月一日に発願、六日に跋文を記した(慈円和歌研究会『慈円難波百首全釈』風間書房、二〇〇九年)。同様に、真俗二諦を分かち合う「道理」と「本尊釈」の二巻を一帖にあらわす「本尊釈問答」の成立が、一年後の承久元年正月六日であることは注意しておきたい。

- (10) 承久元年十月一日の八幡の法楽和歌など、このころ慈円は百首和歌を諸社への法楽として集中的に編んでいる(石川一『慈円和歌論考』笠間書院、一九九八年、『慈円法楽和歌論考』勉誠出版、二〇一五年。山本一『慈円の和歌と思想』和泉書院、一九九九年)。その営みは、「道理」一巻の啓白を踏まえ捉え返す必要がある。

- (11) 『愚管抄』の本文は日本古典文学大系本(岩波書店)に拠る。

- (12) 『續天台宗全書』密教2経典註釋類I、一九六頁。

- (13) 註(3)前掲『慈圓の研究』第二章第四章参照。

- (14) 『續天台宗全書』密教3経典註釋類II、二八四頁。註(3)前掲『慈圓の研究』第二章第四章。この口訣のなかで法華経と同身無二無別の仏と

して列記される大日、釈迦、普賢、観音、文殊、地藏、弥勒、薬師、不動が、すべて十一尊のうちに含まれることも注意しておきたい。

- (15) 『慈圓全集』所収、『鎌倉遺文』三〇三八号。

- (16) 『門葉記』巻九十三(勤行四)所収。大儀法院における儀礼の意義について、註(3)前掲『慈圓の研究』第一部第二十七章、善裕昭「慈円の大儀法院と怨霊滅罪」(池見澄隆編『冥顕論—日本人の精神史』法蔵館、二〇一二年)参照。

- (17) 楞嚴三昧院(講堂、法華堂、常行堂)は建保四・五年の二度の大風により諸堂が倒壊していた(『山門堂舎記』)。

- (18) 慈恵大師と九条師輔による楞嚴三昧院の創始は、『慈恵大師講式』(慈円、建保元年『二二三』)にも記されている。

- (19) 深沢徹「慈円『愚管抄』」(岩波講座日本思想第六巻『秩序と規範—「国家」の成り立ち』岩波書店、二〇一三年)。

- (20) 『門葉記』巻百二十八(門主行状二)「慈鎮和尚」。

- (21) 註(3)前掲書。願文は『慈圓全集』所収、『鎌倉遺文』三二〇二号。

- (22) 阿部泰郎『中世日本の宗教テキスト体系』(名古屋大学出版会、二〇一三年)。

【付記】貴重な聖教の紹介をご許可いただきました青蓮院門跡 東伏見慈晃様に深く感謝申し上げます。稿を成すにあたり御教示を賜りました藤原重雄氏に感謝申し上げます。本稿はJSPS科研費(26284924)(代表佐野みどり氏)及びJSPS科研費(15K02225)(代表阿部美香)による研究成果の一部です。

【追記】再校正正時に、JSPS科研費(15K16877)坂口太郎氏「愚管抄」の文献学的研究(二〇一七年度実績報告書(科研費助成事業データベース、二〇一八年十二月十七日公開))において、氏も「本尊釈問答」に着目して研究を進めておられることを知った。ここに追記する。

〔翻刻凡例〕

一、旧漢字や異体字は基本的に通行の字体を用いるが、一部元の文字を残し、誤写と思しい文字はそのまま表記した。文字の欠損や難読箇所は文字分を空格で示し、残画などから推定できる文字は右傍に示した。

〔□カ〕(ママ)等は、校訂者の注記である。難読の文字が多く、なお誤読を残すかもしれない、識者の御教示を得て改訂できれば幸いである。一、訂正や挿入箇所は指示に従ってこれを訂した。挿入箇所は傍点で示した。(但し、識語の後に位置する問答については、写本の姿を尊重し、現状のままとした)。

一、本文は追い込みとし、読解の便を考え、私に読点を付し改行した。一、丁替わりは「で」で示し、丁付け及び表裏を(一オ)(一ウ)の如く表示した。遊紙は省略した。

【翻刻】本尊積問答

〔表紙〕

「求法沙門尊純」(後筆)

一曼荼羅十一尊

本尊積問答

末代真俗二道ノ事ハ、聊有テ覚知ニ制ス二卷ノ書ヲ、其心委可記置之、門徒之中ニ若深思入テ二諦一、有成不審之人ニ者、披此記可散蒙一歟、但已上見此末代人ノ根性一、都以一切事不覚知者歟、然者(一オ)雖記之、無人于不審一者、又無人于披見一歟、

建保七年(己)正月廿七日、彼右大臣源実朝零命了、

則左大臣若公(頼經)為繼彼將軍跡、同六月廿五日、令下向関東、

四月十二日改元也、承久元年

予(慈母)、同正月、於天王寺祈請真俗事、聊有夢想等、其後聞如此勝事、(二オ)此

実朝滅亡、左府若公下向、一向非直也事、八幡大菩薩不棄給吾国、神之御方便也、深所信仰也、其故ハ、先去年(建保六年)正月、中宮(立子)又御懷妊歟、

聞此事、自二月朔八幡(二)令參籠、手替祈念、同三月五日夜參詣通夜之間、妙經一部・神呪一万遍法樂之、此夜、檢校祐清納受法施之由、新感得夢

告了、十月、果以王子降誕(後醍醐王)、御産平安、則十一月、立太子了、其次年、

実朝祖父我館内奉祝八幡宝前拜賀、其神殿前(ニテ)、被刎其頸零命了、二三月之間、左府若君(三ウ)令所望、令繼其跡了、当此時親疎之中、貴賤之間、

夢想告甚以多々也、皆此趣也、件少人、二歳、称三寅御前(云々)、寅歳寅月寅時令誕生了、仍有此名(云々)、六月廿五日、下向ノ日(ヨリ)一切無泣音(云々)、

其進退似成人心(云々)、上下即從婦之、如此子細得而不可称、不可説々々々云々、然依為事珍事、嚴親以下人、以成疑、予悟此由来、書一卷道理、

作本尊尺等了、令為後見粗記之、(三オ)似符合、同二月廿四日、有夢告、

同閏二月三日、左府若公所望之由、伝聞之、二月廿四日、夢想忽以相叶歟、自尔以来、覚知万事、如予存、無覚悟人歟、仍書道理一卷、(在別)件旨趣、在彼卷而分明也、(三ウ)但取心仮名書(二)不書蹟之者、猶愚意之詮、

難覚知其本意歟、

先、理国之道、自神代次第衰滅、其中吾国之法、初(メ)只王一人(ヲ)、次加臣(一)、仍二人也、是、天照大神御時、則アマノコヤネノミコトニ有御一諾(鹿嶋大神也)、

次、臨末代、脱徒君令執政一給、仍又三人也、其後(四オ)乱逆国(ニ)起(テ)後、武将亦執政、已又四人也、

主上(不可棄之、似無本説)、執政臣(不可棄之、大神宮御約諸臣也)、太上天皇(不可棄之、又不可棄之)、

武將内亂起之後、於今者又不可廢之

而主人小国二已四人、各互有嫉妬矯慢、誠以甚歟、其中、主上ハ、武將以
後ハ、大略幼主也、仍只国王之号〔4ウ〕許也、御成人之後、二条・高倉兩所ハ、
平將軍清盛公、後白河院ヲ奉打籠テ、主上ヲ立テ面、執天下政歟、先レ於白
河院御時、堀河院御成人之後、撰錄ハ、後二条者、事外ニ御治国云々、但各
嚴親御在生之間、令早世給了、
平治以後、一向逆亂不絶、遂年国政在武士手、於近年者勿論々々〔5オ〕、

凡、王臣臨末代、一向迷道理一、以嫉妬心為本、内亂之源、戰而在之、
国王ハ撰錄臣ヲ令妬、賜臣又見此 叡慮之間、或時正之〔6ウ〕、或時怨之、而
武將出來之後、於内覽撰錄之臣有若亡、射山又大略被閑執政臣事、遂日
有若亡、爰今独醒 悲之時、聖德太子歟 十七ヶ条憲法在眼一、

第十云、不怒人ノ違ハム、人皆有心一、是非之理誰能可ケン定一、賢ク愚コト
如環無端一、是レ以我独トリ雖得一、從衆一同ク舉マツリコトスシ、
第十四云、群臣百寮ハ無カレ有コト嫉妬一、我既嫉人一、々亦嫉我一、嫉妬之
患不知其極一、其不得賢聖一、何以治国一、

事之道理只在之、予問今世、悲而書此道理一卷也、
閣近古、彼堀川院一後二条殿一、属此世テ面白キ物語アリ、清盛平太相国
入道カ娘入内立后、高倉院在位為中宮、令祈皇子誕生一、先母〔時子〕二品祈山
王、不得其驗、入道云、我祈嚴嶋神二百日内可有其驗一、嚴嶋者安芸
国ノ一宮、龍女云々、年來婦也、以御子女筮称内侍、仍造早船類參詣、六十

日之後、中宮懷妊、奉生 安德天皇、清盛、帝ノ外祖ト成テ一向独歩、仍
打籠 法皇、取国政之間、及遷都之大事也、依之滅亡之、今 主上〔安德〕
遂以浮海上之〔6ウ〕、沈海底給了、是則、龍神之一旦レ構也、吾国大神善神等、
犯誠之給歟、此時、遂以宝釧沈海底了、末代衰滅ノ因縁、冥感成就ノ次第、
人以可知之事也、只婦社稷之善神、可通正道也、道鏡之時、宇佐仰云、

邪神之力健シ、善神力弱ク、其時猶有此告、況末代哉、但神以人力為

我力、只以善心可祈善神也〔7オ〕、

共先立嚴親御非常、仍其政同還父ノ院一、父ノ殿二了、当世事、重案思之、
其後、々白河院御時ハ、又王子二人即位、二条院御時、国政院不知食、
高倉院御時、又安德天皇即位、二歲一 祖父法皇不知食之、共二是ハ、大將軍平
清盛公執政之故也〔7ウ〕、

初中殿〔基母〕執斝、則又覺給了、松殿撰錄家領文書不伝之、北政〔平盛子〕所伝也、清
盛女、中殿北政所也、次第有若亡、如此之間、終以大亂、松殿出家配流、
遷都事云々、可謂不足言、
其後、頼朝卿打從五畿七道了、

其後四五年、九条殿〔以乙〕旧例執政、則又解却之後、還近衛撰政、又後京〔長經〕
極殿為撰錄、天下之趣為宣〔8オ〕、則又早世、其後当関白〔家美〕、大略如平氏、
末代法尔、不落居次第如此、皆人心時宜偏叶、今レ機失道理一也、依之、
天下真俗、次第有若亡、

伝聞、八幡大菩薩可守給百王一、今八十四代也、
而將軍之滅亡、前代未聞ノ不思議也、然撰錄家左府胤子二歳三寅御
前〔8ウ〕、此小人、忽以下向、事由來ヲ思フニ、撰錄臣一武將家、以此文武
之兩家、定彼王家之忠臣、成中興之政、吾神暫之間、可令守護天下給歟、
而猶、上下相互有嫉妬之興趣、雖理〔ラサマ〕不可理一、雖叶道理一、亦可失

道理一也、此思慮〔其〕甚以難謝之間、書道理一卷一啓白諸社一、既大事、北野
天神大權御方便〔9オ〕、依有覺悟之旨、令啓白彼社一、而 八幡大菩薩・伊
勢大神宮、大略為納受一、似召取此觀狀一、不意二相応一縁等、忽然來テ進
納之、既大事、随又、慮外二有相応事一、

内宮〔兼木田氏〕一棟宜氏能云、
至極道理也云々、
一定道理也〔9ウ〕、

是等次第、一向冥感之令然歟、

而今、王臣嫉妬^ラ止^テ致德政^一、被行道^理者、真俗^二諦、何無中興哉、去年孟夏下旬、書件道理、于今無相違、其後仲秋之比、深加案之間、先立書本尊積了、若遂其願者、^(10オ)欲備緣起文也、

件尺在別、其旨趣載文言了、但聞難得其本意歟、予加案云、

如此事、非弘法加被者、難得其美、而余命于今令存事、希有之中不思議也、任天台座主既以四ヶ度、每度次年辞退之、深我器量不叶^(10ウ)時宜之由、思知之故也、辞退之間、全無後悔、嫌退之後、弥有開悟、試^ミ只以無緣慈悲可致祈願之誠也、而老年向七旬、心力不似苦、三時四時行法、座々朝夕勤修、於今者勿論也、

而今、弘之誓願^ト教文之本懷^ト、只以一念^(11オ)、真実^ナナル^ヲ、諸法ノ成就^ヲ、令得也、而一弘一切弘、利生之道、隨機差別、當機之誓、悉浮愚慮、皆似

知其本意、仍修一曼陀羅行法^ヲ、入十一尊三摩地^ニ者、以此一人之心^ヲ蓋得^ソ万乘之方法^一哉、為不蔑如事^(11ウ)相^一、可儲奉其本尊^一、凡夫之淺智、向如此本尊^(12オ)、發信心^一之故也、仍欲顯真金像^一而已、

次行法、以仏眼成身瑜祇經心^ヲ、加師資之口伝^一、觀凡聖之相應^一、其

四種曼陀羅行法之肝心也、
大曼^(12オ)々々々、^(12ウ)色像、地水火風空

三摩耶曼陀羅、
三摩耶形者、本誓之形也、金剛杵等、世間事相、隨類之形体也、

法曼々々々、
法曼^(12オ)々々々、^(12ウ)色像、地水火風空

三摩耶形者、本誓之形也、金剛杵等、世間事相、隨類之形体也、

法曼々々々、
法曼^(12オ)々々々、^(12ウ)色像、地水火風空

事業威儀ノ行法、供養恭敬之業因也、
天台ノ真言^(12オ)ニ、立七分ノ次第ヲ修行法^(12ウ)ヲ、

行願 三摩耶

成身 道場

供養 作業

三摩波多分等也、

此七分ハ此四種曼タラ也、

然四種曼タラ最極秘事、予一人伝受之、就之、見瑜祇經行法、以大成就品心^一祖師等造^タマヘリ、仏眼ノ成身^ヲ、在四印、行位、薩埵、仏眼^(13オ)、八字也、又瑜祇經有十二品、件印明、秘教之肝要也、

次第生起、叶深奥之悟^一也、各所取^一之本尊^ヲ令加持^一、為成就其功德^一也、故尽結誦^一、生起次第^(14オ)、

其中、薬師如来ト觀世音ト利生之當機也、覺悟^ニ得証^ヲ、道理^ニ有文証^(13ウ)、思惟^ニ存現証、發智^ニ伝口決、豈敢不修之乎、件等委曲、就今、一卷ノ積^ニ、可決不審ノ耿介於問答^ニ也、

問、先初以此瑜祇經^一蘇悉地妙成就也^(14ウ)、蘇悉地ト此經ト各別ノ書也、此詞如何々々、^(14オ)

答^テ云ク、先令解尺^ハ、以甚深心^一、超^ヘテ而記^一、一往之不空、每句^一在^一、歟、然而、得其心^一之人、皆先立可得其心^一也、而今、問答^ハ、為令教誨無深

悟^一之人^一也、彼瑜祇經ト蘇悉地トハ、共両部肝心也、其心ノ向^キヲ、為令顯^ニ如此事也、以此次重可決^(14ウ)、

凡両部ト云ハ、一部也、只真言^一一教也、胎ト云ハ、真也、金ト云ハ、言也、是^レ正^クハ、瑜祇經ト蘇悉地トニテ、令成就也、瑜祇經^ハ、以說本尊^一為本^一、蘇悉地^ハ、以說行法^一為本也、一切、真俗之方法^ハ、以二頭^一也、仍有天地^一、有昼夜^一、有男女^一、一ト云ハ、悟^リ也、凡聖^ノ二途法^ルニ存^ス、对^テ此^二道^ニ悟^レ佛道^一也、^(15オ)

問、五行ノ相剋^ヲ從本垂迹^{云々}、如何々々、

答、其心尤珍^シキ歟、是^ハ、今ノ行者、以今案^一顯譬喻^一也、其取^リ寄^リハ、今此曼タラ^ニ以七曜^一為内眷属^一、此心甚深而肝要也、属^一之^一、顯^レ之^一也、^(15ウ)

諸法ノ相剋^一云ハ、其物ノ熾燃^{ナル}カガ、消滅^ノ期来之時、其消滅^ノ縁^ニ成物^ヲ拳^テ為相剋^一也、水剋火等也、是^ハ、十界ノ形状^ハ、皆仏智^{ヨリ}出生^ス、仏智ノ次

第二緣ニ随テ下リ出ツル也、次第ニ善ナリツル悟リノ迷ヒ出ツル也、仍相廻ニ譬フルナリ、
仏智ヨリ迷出タル人ノ又仏智ニ行シ入ル、仍修因向果也、今ノ七曜(16オ)ハ、俗諦ノ
之盛衰ヲ令加護ニ之冥道也、真言ノ極位ノ曼タラ、以之ヲ利益ス衆生ヲ故、
此譬喩、甚以大切歟、

問、存此心之時、不用臙燭云々、其心如何々々、

答、仏眼ト七曜トハ、非ス各別ニ、所具之一体也ト習也、此一体ヲ為令顯、越
而置内(16ウ)院ニ、向此曼タラニ備ハハ、別之供具、似不知本意、仍不用之、
問、四種曼タラ并一經諸尊印、一々用之云々、

今尺ハ略文言義理ヲ、カスメテ令書之歟、

此双紙ニハ今少為令顯其心云々、仍可被委答之歟、

答、在下可答之(17オ)

問、真言教宗義ハ從本垂迹也云々、如何々々、

答、今ノ行者之悟ハ、只在此大事也、広ク令尺之者、不可有尽期、其詮
之一言ハ、今真言行者ハ、大日如來ノ從本垂迹之身也ト悟ニ之、就之、修
行此宗也、故云尔、他ノ八宗ノ教ニ、未聞此義也、正シク此凡夫行者從
本垂迹ノ身ナリ、(この丁、左上隅に補入記号あり、17ウ)

問、今此行法ハ、積尊ノ遺法也ト云々、大日ノ遺法トソ云ハキ、如何々々、

答、一代聖教ト云ハ、一代教主ノ説也、故云尔、

問、大日經等、以大日為説教仏歟、此相違如何々々、

答、普賢滿月光明心殿等説モ、大日身ヲ積尊ノ令現給ト可心得也、(18オ)
惣以教々ノ教主、每其教可差別、今真言教主、自古學者尋之事也、未必
定得、或他受用、或自受用、或法身等、先德実説歟、而定僻了見歟、トハ

疑思給、可決師今ハ不值遇、可悲々々、但所悟、非無証拠、真言教主ハ、
只法身如來也、今第四禪説等(18ウ)ハ、皆非真仏變化身也、仍積尊隨教之淺深、
示現而説之也、

真言真実教主ハ、只大日如來、以仏界所具十界、自受法樂無間斷ノ所化、

對機説法也、其浄土ハ深法界也、如此得其意之故ハ、一向顯宗之面ニテ、
猶本門寿量之時(19オ)ハ、自受用身説也云々、

又秘經云、釈迦如來、深法界宮大日ニ奉問、伝説難義云々、
以此二義得其心也、

問、然者、真言教宗義、從本垂迹也云々、入此宗之時、可存其義者、教
主ヲモ只深法界法身如來(19ウ)可定哉、如何々々、

答、サレハ其法身如來ノ變化身ニテ令説賜也、是則、一代教主也、然深法
界如來ト思テ不云之心ハ、今真言學者ハ猶真実ハ、修因向果身也、依教之本意
從本垂迹、成身ヲ先令觀コトハ、其從本之本仏ヲ顯(20オ)為令修因向果也、
故ニ今此穢土娑婆世界ノ迷ノ衆生ノ為ニ、彼深法界無始無終積尊顯本ノ本仏、
大日如來變化シテ、等居士ニ令出給、其所化衆生ノ身ニテ未悟之間ハ、如此

意得テ可修行也、説教ノ深意ヲ聞許也、仍懸心無始之内証也(20ウ)、知与証尤
各別也、今所存如此、以之可准知一切歟、

以真仏ノ大日ヲ可為教主者、秘經ニ何故ノ積尊ノ伝説ト可説哉、

真言ノ教主、可為自受用身者、何故顯教之面、本門ノ仏ヲモ可云自受用身哉、
以之思之フニ、於諸法者、穢土出(21オ)世之一代教主、只隨淺深自在ニ、淺深ノ
身ヲ現作シテ説給也、依之、真言ヲ積尊ノ遺法也ト令存、全無答、何況一字
金輪ハ秘仏之本也、以其一字明、尺尊正シク説曰ハク、

我滅度之後 分布舍利已

當隱此相好 變身為此呪云々

説ハ皆尺迦ノ説ナレトモ、於教ノ本意者、真言宗ハ大日(21ウ)説ナルヘケレハ、大日与
金剛薩埵ト、對機説法之本意ヲ積尊ノ示現シタマフ、經々ニハ又、其マニ令
翻譯也、此面ニテハ、只猶大日説ト云ハント思ハシニ、學者ハ又令執此説ヲモ、全
不可妨歟、

問、然者、十界各々ノ所具ノ十界ノ身ニ、可有淺深哉、

答、必可有之、

問、以何得知哉、^(22オ)

答、甚以易知之歟、假令、当世衆生、内外典学者之中、所悟之真実、智、有浅深分別也、其浅深巨細、先十重、浅深ヲ作出シテ、次第、最第一ノ智解、人ヲハ、仏界所具衆生界ト可知也、最下ヲハ、地獄界所具衆生界ト可知也、以之、為易得其心^(22ウ)

問、若然者、第一深智之人、已可為仏界所具衆生者、以其人為真言師、此真言師之感得ハ、不可用一代教主、直以深法界大日如來可為教主歟、

答、宗之本意ハ然也、返々所許之本意也、

問、然者、何可云釈尊遺教哉、^(23オ)

答、知与証各別也、以前令答了、今学未証也、付之、又釈尊之面ニテ、一向真言ヲ令説給也、以此二ノ心ヲ、猶以一代教主可為其本也、一代教文、約束ヲ如此令料簡也、今学者、以此心正義ト存也、

問、以弥陀為真仏^(23ウ)、然者釈迦葉師ハ非真仏哉、^(23ウ)

答、以弥陀^(23ウ)一聲塵ノ教主、妙觀察智ノ智仏也ト定ムル時ニハ、尺迦^(23ウ)葉師モ弥陀ノ化身ニ、説法声塵ノ方ハ成ルルナリ、

サテマタ一代教主トイハル、時、滅後ノ利生ノ身ト定ムル時ニハ、一代ニハ、尺尊真仏也、滅後ニハ、葉師真仏也、弥陀十方厩土ノ面^(24オ)ニ、ヲハシマセ、全真仏之体ハ此土ニ來給、化仏^(24オ)上品上生ノ人ヲ來迎シタマヘ、因之、一代ト滅後ト、真仏ヲ為令顯、弥陀ハ真仏也ト令書也、如此事、無此尺者、人以難得其心歟、仍此問答、尤大切歟、^(24ウ)

問、中堂葉師如來印相、如何々々、^(24ウ)

答、是ハ不可答、

問、遺身葉師之良葉、訪医術於行者ト、此句心、如何々々、

答、以葉師定滅後ノ真仏ト、コトニ一向今行者ノ智解也、為顯其心也、

問、弥勒ノ顯文証於大日^(25オ)、其心如何、^(25オ)

答、是ハ弥勒ヲ本書中ニ大日也、々々々トハタシニ令説文ヲ指也、其心ハ諸

尊ハ併大日ノ身也トハ、凡教ノ本意ニテ習伝フルコトトレトモ、正シク如此文ハ、又每尊ニモ無之、而今、當來教主ト被定給菩薩ヲ、如此本書ニ令説顯コトハ、今所述之本意也、仍又引其文也、^(25ウ)

問、四菩薩ハ一菩薩也^(26オ)、今文ハ似取普賢歟、而今、此一菩薩ニハ、以觀音為利生本哉、

答、然也、以弥陀為真仏ト如令書也、以之可准知、依所記之一途、各一菩薩ト可成也、

成身行法ノ時ハ、以普賢為一菩薩、智身ノ菩薩ヲ取時ニハ、以文殊為一菩薩ト、娑婆世界^(26オ)ノ利益衆生、急難ノ無為ヲ為本之時ハ、以觀音為一菩薩、以無仏世衆生、拔苦与樂ヲ引導ノ使ト定ムル時ハ、又以地藏為一菩薩、而四菩薩ト取ハ如此功用、諸大菩薩之中、此四菩薩ヲ取出ハ如此之故也、

其外台藏院^(26ウ)、

地藏院 虚空藏院

除蓋障院 文殊院

此四菩薩^(26ウ)一院ノ主ト定ムルコト、又以今心可准知也、不動明王之上ニハ除蓋障菩薩不取之、

大日ハ在五大虚空藏、此五大虚空藏ハ、在仏眼曼陀羅ニ、仍不取虚空藏、

問、文殊在八葉、何又占一院哉、

答、於智身ハ一切ニ不可闕之故、外院重ヲ置之、^(27オ)

問、内院弥陀在マシマス、文殊無益歟、

答、於智身ハ因之、智果之智、共大切也、此心ハ可広尺歟、但略之、可^(27ウ)知々々、

問、行位等四印菩薩四種曼陀羅、以口伝能可聞之、載文言不可説之、^(27ウ)

右ノ問ニ在下可答、

此所ニ可有其益歟、

答、然也、但猶於此正宗之修行印明所用四種曼陀羅等、分明尺ハ可有

其憚也、中堂藥師仏印相、猶以不說之、何況行法印明之生起、并四種曼夕ヲ發智以下、具^(28オ)在別、可見彼也、於此一巻、此一帖^(28ウ)者、外見不可、憚之方多存之、仍不可載正修行用口伝等也、

問、二、譬喻^(28ウ)心、分明不得其心、如何々々、
答、是、淺近之喻也、委令述者、還可招嘲弄歟、

問、猶淺近之一言、大切々々、
答、於道理者、今所書顯之本意、只在此道理也、而其心不委、今一重、委々細々、可述之歟、

次、譬喻^(29オ)如用飲食、此尺尊滅後、末代惡世衆生、一切菩薩、一切如來、縱橫之功能、甚以多々也、其中、此時、此藥師、此^(29オ)此觀音ヲ取也、叶雅意之時、如用其食也、令喻之許歟、入我智解、可思之、

問、此後、文言強無可成不空之節歟、今重加領解詞、可尋申、二尊不空歟、大日之本、置而不論之、一代之尺尊、當來弥勒、声塵弥陀、真実之儀、旁明也、又菩薩之中^(29ウ)為成身普賢行願、為了知文殊智恵、後世之引導如來、作如來藏、菩薩、乃至不動之降魔、毘沙門之護世、仏菩薩明王天等、皆以無珍氣、人之所知也、還不可及如此解尺、誠以易知易覺歟、此世流布之仏法、常恭敬之諸尊、一々之道理、面々之功用、聞之後、雖無珍氣、不聞之間、未必為此悟哉、^(30オ)人、專可賞翫、或人定令蔑如歟、然而別願之願主、書此一巻於其志者、只可在冥衆知見也、
於藥師觀音、伝教弘法之本尊、渡唐求法之本意、真俗四聖之變化、現當一途之利生、於証拠者非可成不空、於道理今少可被加述歟、^(30ウ)

已上領解之上問也、

答、於藥師如來者、先只本願藥師經^(31オ)教遍訓^(31ウ)誦之、其心^(31ウ)涯分至極^(31ウ)可覺知也、其外^(31ウ)解尺不可入、々々々、

次尺尊同身也、一向得其悟之後、其信心甚深、次以藥為名、令行者得病^(31ウ)悟之、病^(31ウ)生自十惡故、末代衆生之^(31ウ)所受之衆苦拔齊、只一在此尊、

文理無不空、不能委述也、

觀音、急難之無畏、只可在濁世、其上、此觀音^(32ウ)、弥陀之同身、法花之同體^(32ウ)、ヒシト説教^(32ウ)決定^(32ウ)、其弥陀之教、其妙法之文、以此二教、今世衆生一向歸之、行之、而聖德太子、慈恵、大師、大織冠^(31ウ)、菅丞相、一定觀音化身也、世之所知、人之所不疑也、文理証拠、仁菩薩如此哉、是同^(32ウ)委細解尺不可入也、重可察之、淺智深智、覺者愚者、貴賤上下、道俗男女、老少中年、此一巻此一帖披見之時、其思惟如何々々、多^(32ウ)見之後、改編之、自發之悟、定不及此文^(32ウ)言歟、為有信之人、必然^(32ウ)可有其要歟、而於信心之一事者、先令發願之、小僧、一定闕如歟、唯以道理之一事、書二巻一帖、既説仏神、必助成此發願^(32ウ)、
件道理本尊積等二巻、書写一帖加置之、可宜歟、

承久二年正月六日、^(32ウ)於無動寺大乘院書之了、
金剛仏子慈^(32ウ)

問、不変真如^(33オ)一仏大日也、
以此大日為真言教主^(33ウ)、

論主伴事^(33ウ)、隨緣真如之下^(33ウ)沙汰也、此言尤不空、
答、下云從本垂迹教也^(33ウ)、仍云尔、^(33オ)

問、就此答、弥其不空、尤甚深也、垂迹^(33ウ)已隨緣真如^(33ウ)本^(33ウ)非哉、
答、此事甚以広博也、取心^(33ウ)其詞少^(33ウ)欲答之、已有煩、但所覃難

默止、真言教、只一仏法界^(33ウ)教也、故一向離九界^(33ウ)形狀^(33ウ)了、為顯其心、
如此令書^(33ウ)也、隨緣真如^(33ウ)可有淺深^(33ウ)也、其仏界所^(33ウ)具^(33ウ)隨緣真如^(33ウ)、
臨^(33ウ)九界^(33ウ)之時^(33ウ)、猶不變之一理^(33ウ)内也、令得其心^(33ウ)也、サテシカモ其一々
變作、一々形状、迷悟姿^(33ウ)、不相違^(33ウ)、煩惱即菩提、生死即涅槃、顯宗^(33ウ)
有其詞^(33ウ)、如此談^(33ウ)、不顯此義理^(33ウ)歟、今真言之悟^(33ウ)、具以如此、安然

和尚一切一心識之外、一心^(34オ)識^(34ウ)立^(34ウ)、為今^(34ウ)秘教^(34ウ)、仍一心々々識之
中、從本垂迹、隨緣真如也、一仏一切仏者、限仏界^(34ウ)之時、猶可為不變

之義^一也、故如此令存^テ令書顯也、

・問、仏界所具^ノ十界^ヲ不反真如^ト記^{ナラハ}、事之互具^{ニハ}非歟、如何々々、

・答、殊事之互具也、所以者何、今之真言行者^(34ウ)「修行之身、大日^ノ從本垂

迹之身也、是已眼前^ノ事相^ニ非哉、如此等^ノ悟^ニ、淺深已分明也、入此深

意^一、凝此觀念^一以之^一為^ス真言宗^ト、余教^{ニハ}無義^一、無文^一、今^ノ教^{ニハ}有

義^一、有文^一、以淺近之義^ヲ、不可難深奥之義^ヲ、若不許此義^者、以^カ何

ヲ論宗之淺深^ヲ哉、

・問、猶甚以有不審、真言^(35オ)「行者ノ仏界所具^{ナレハ}、不變真如也^{トハ}、如何々々、

・答、如仏入滅、常在靈鷲山^{云々}、仏知見之前^{ニハ}非入滅、我等衆生^{マテ}全不

入滅、凡者之見^ノ前^ニ令變也、故仏界所具十界者、仏之知見十界也、故

「常住也^(37ウ)」此法門^ハ知人知之、無機之人不可知之、又不信之、就之可有

不可說之義理哉、

・問、其不可說之義理、如何、

・答、不可說々々々也、仍其言語難及、退^テ其可答文言^ヲ可思慮也、試謂

之者、一切諸法變滅之体^(38オ)「其員數五百塵点之員說之後、又立還之時、

一向諸法常住也、可知、積尊^ノ顯本^ヲ九界衆生^ノ知事^ハ、五百塵点^ノ顯本

之後^ニ知之也、

仍悟此理事^ハ、發此智^{之上}ノ悟也、

勝鬘夫人歎如來^云、

如來妙色身^(38ウ)」

一切法常住^{是故}々々々^(39オ)」

元亨二年十月廿日、以和尚御自筆本、跪書寫之訖、

清淨金剛慈嚴記之^(40オ)」